今年度の小野市男女共同参画センターのテーマ「ジェンダー平等に向けて、私たち一人ひとりができること」のもと、６月に講演会「笑って考えよう 家庭のこと　仕事のこと　未来のこと　男の家事が社会を救う！」が開催されました。

講師はジェンダー論研究者の瀬地山 角さん（東京大学大学院　総合文化研究科教授）。「男性は出産できないが、子育てはできる。」と、ご自身の家事や育児の経験を交えながらの講演でした。

また、後半には地元高校生とのディスカッションも行われました。

講演を通して、私たち編集委員が気になった次の４つのことばについて考えてみました。

ことば 1
男の家事・育児、少なすぎます！

ことば 2
結婚で何が求められているかご存知ですか？

(c)HONOTA design

ことば 3
人間の多様性を「男」と「女」ふたつの箱に入れるな！

ことば 4
男の家事が社会を救う！

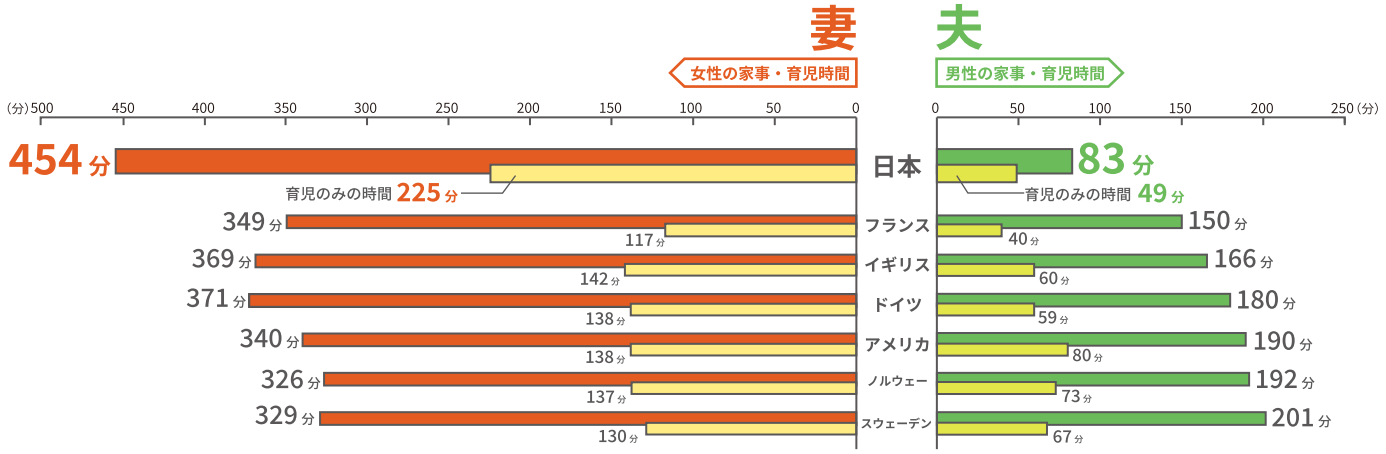
ことば 1　男の家事・育児、少なすぎます！

現在、日本では共働き世帯が約７割となっています。（男女共同参画白書 令和４年版）

しかし、家事・育児時間を比較すると男女間で大きな差があります。世界の国々と比較しても、日本の男性の家事・育児時間は圧倒的に少ないことが分かります。

これは、男性の長時間労働や男性の育休取得の難しい現状のあらわれかもしれません。

女性と男性の１日あたりの家事・育児時間　国際比較



「男性の暮らし方・意識が変われば日本も変わる」（内閣府）https://www.gender.go.jp/public/conceptposter/pdf/conceptposter_a4.pdf を加工して作成

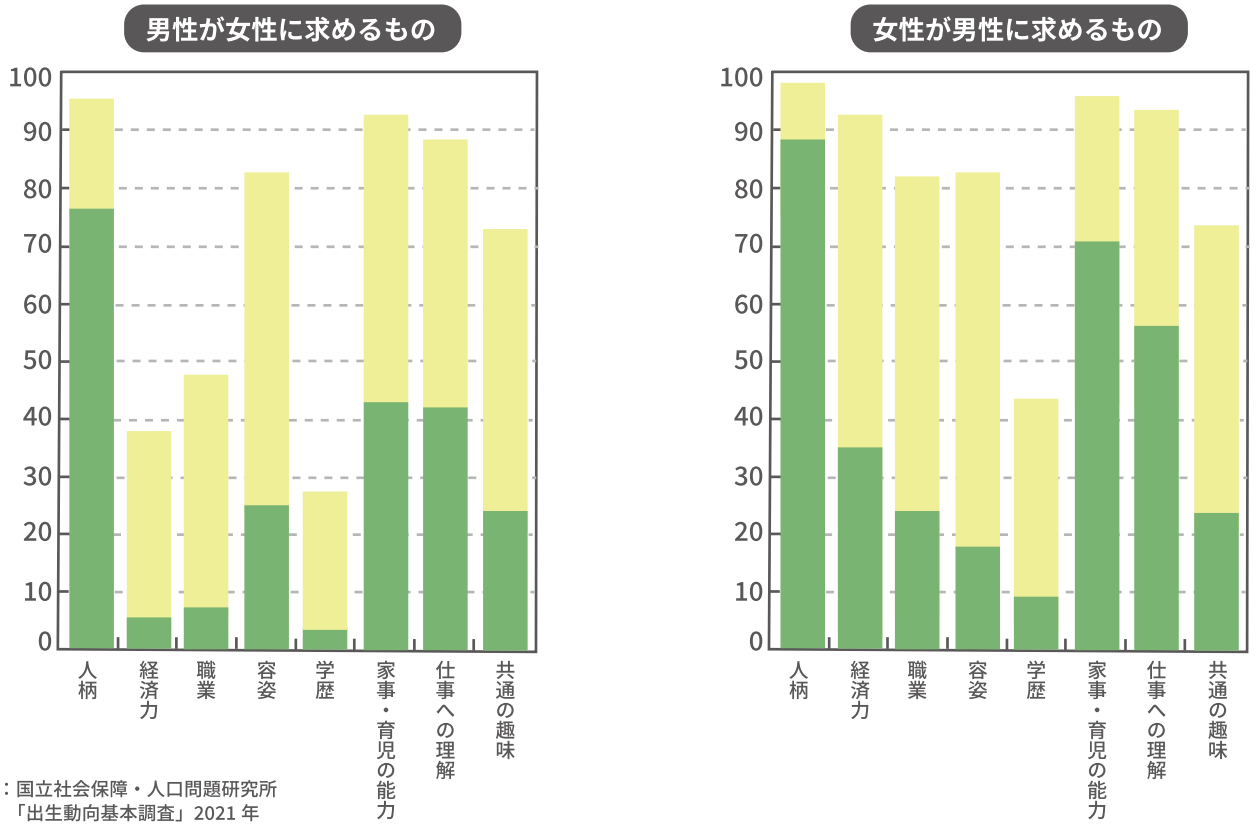
ことば 2

結婚で何が求められているかご存知ですか？

現在の独身者がパートナーに求める条件として「人柄」を除くと、男女ともに「家事･育児の能力」が一番多いという結果が出ています。

国勢調査で女性の働いている割合が最も低いのが 1975 年です。この時代、男性には経済力が求められていました。現代では、男性は女性に経済力を求める傾向にあり、一方で女性は男性に経済力を求める傾向が少なくなっていることも分かります。

結婚相手の条件として求めるもの



出典：国立社会保障・人口問題研究所「出生動向基本調査」2021 年

実際に、瀬地山さんと地元高校生とのディスカッションの中でも、将来やりたい仕事があり、その目標に向かっている女子生徒は「将来のパートナーには、家事・育児能力を求める。」と話していました。また、親が共働きである男子生徒は、将来のパートナーにも働くことを望み、母親が比較的家にいることが多かった男子生徒は、将来のパートナーに家事を担ってほしいと話していました。

私たちはこのディスカッションから、パートナーに求める働き方には親の影響が大きいと感じ、さらにはジェンダー意識が親によって形成されるのではないか？と考えました。

そこで、特に子育てをすることが多い 30・40 代を中心に、自身と子育てにおけるジェンダー意識についてアンケートを実施しました。

ジェンダー意識に関するアンケートの結果

実施期間：令和５年８月～９月　　回答数：117 件（女性 76.07%　男性 23.93%）

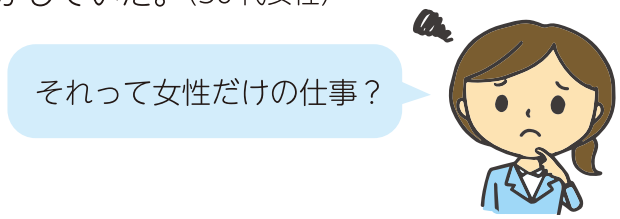
質問 1.　これまでの人生の中で、自分自身が性別による決めつけをされた経験はありますか？

生活編

・子どもの頃は、「女の子なんだから大人しく」とよく言われていた気がします。（30 代女性）
・大学受験時、女は短大でいいのでは？と言われたことがある。（40 代女性）
・子どもの頃、祭りに参加できなくて悲しかったです。（40 代女性）
・仕事をしていても、女性が家事をするべきだと母から言われること。（40 代女性）
・女の子を出産した時、私が好きな水色のベビー服を着せたら、母親から「そんな男の子みたいな色を着せないで！」と怒られた。（40 代女性）
・実家での法事の時、女性はご飯をゆっくり食べる間もない。手伝わないと、親や親戚含め文句を言われる。（40 代女性）
・長男だから実家を継ぐよう言われた。（30 代男性）
・男らしいとか、女らしいとか、男気とか、ええ男になれなど。悪気なく使ってきた。（40 代男性）

仕事編

・女性しかゴミ捨て、茶器の洗浄をしない。お茶汲みは女性の仕事、ノーメイク禁止、ストッキング着用強要、宴席での食事取り分けも女性の役割。（40 代女性）
・トイレ掃除は、男子トイレも女子トイレも女性社員がしていた。（30 代女性）
・お茶を出すのは女性社員が当たり前。（40 代女性）



・若い頃、「マスコット的にいてくれたら良い」と言われた。（40 代女性）
・台風の時は女性だけ先に帰らせてもらえたり、大事にされていると感じることも多い。（40 代女性）

その他

・男だから泣くなとか、職歴に穴があると問題視されるなど、男の人の方がマイナスになる決めつけをされることが多そうだと感じます。（40 代女性）

質問 2.　子育ての中で、性別を意識していることはありますか？

・特に意識していない。男女とも、子どもの好みや興味を大切にしたい。（30 代女性）
・子どもたちには性別を意識せず、自分の好きな「色」「もの」を大切にしてほしいと思う。（30 代女性）
・子育ての中で、つい色をきめがち。（30 代女性）
・男の子は女の子にはやさしく。（30 代女性）
・男の子は男らしく。（40 代女性）
・女の子は行儀良くしてほしいとか。（40 代女性）
・昔はありました。でも、時代の流れに沿っていかないといけないなと感じています。（40 代女性）
・女の子は女の子らしい遊びをして欲しいと思っているけど、言わないようにしている。（40 代女性）
・小さい頃、体の性については伝えるが、心の性は決めつけないようにしている。（40 代女性）
・女の子なので、ライフステージに応じて働き方が自分で選べるような仕事に就けるよう、学業に取り組んでほしいと思っています。（40 代女性）
・無意識のうちで、男の子には大学院まで行かせてやりたいと思っていたが、女の子に「私だって大学院に行きたいのに」と指摘された。（40 代女性）
・自分はジェンダー平等に対して理解していると思っているけれど、息子が 1 歳くらいの時に、車や電車を指差し始めた時に、ほっとしたのも覚えている。（40 代女性）
・私も男性と同じことをやらせてほしいのに、女性だからと事務しかさせてもらえず、収入が少ないのが悔しい。だから子どもには、性別で不利にならない職種に就いてほしいと思う。（40 代女性）
・性別に関係なく、自分の身の回りのことは自分でやってほしい。服装は自分が心地よい色を身につけたらいいと思う。（30 代女性）
・ジェンダーをあまり意識していませんが、男の子女の子それぞれ役割があっていいと思う。お互い出来ないことは補い合えたらいいですね。（40 代女性）
・子どもたちには一人で生きていけるようにと思って、小さい頃から色々手伝いをやらせてきた。夫も家事をしてくれるし、子どもにも「家族だから家のことやって」と教えてきた。（40 代女性）
・性別で分けずに、得意不得意で手伝いをやってもらうようにしている。（40 代女性）
・性別にかかわらず子育てしている。
　例えば、おもちゃを性別では選んでいない。（30 代男性）
・女の子だから下品なことは言わないでと言っている。（40 代男性）
・男の子だからこんな服、スポーツ、テレビ番組が好きだろうなどの偏見があります。（40 代男性）

ことば 3 人間の多様性を「男」と「女」ふたつの箱に入れるな！

アンケートの中で、「仕事をしていても、女性が家事をするべきだと母から言われること。(40 代女性)」と、性別による決めつけの経験が出ていたように、このような考え方が根強いの世の中では、女性にとって、仕事、子育て、家事と負担は大きくなるばかりです。それならば子どもの数は少ない方がよい、という考えに至るのは自然な流れと言えるのではないでしょうか。

アンケートのおもな対象である 30・40 代の回答から分かったことは、自身は幼少期から社会に出た後も、性別による決めつけを受けてきた経験を持っているのに対し、子育てにおいてはそれを踏襲せず、今の時代に合わせて、性別による決めつけをすることなく、できるだけ子どもの思いを尊重するという考えの方が多いことが分かりました。

「子育ての中で、性別を意識していることはありますか？」という質問に対しては、「昔はありました。でも、時代の流れに沿っていかないといけないなと感じています。(40 代女性)」という回答が見られました。教育においてジェンダー平等意識を学んでいる子どもたちの親世代は、戸惑いもありつつ、刷り込まれた概念を塗り替えているところなのかもしれません。

性別ではなく、一人ひとりの適性や個性を尊重できる、そんな社会が望ましいのではないでしょうか。

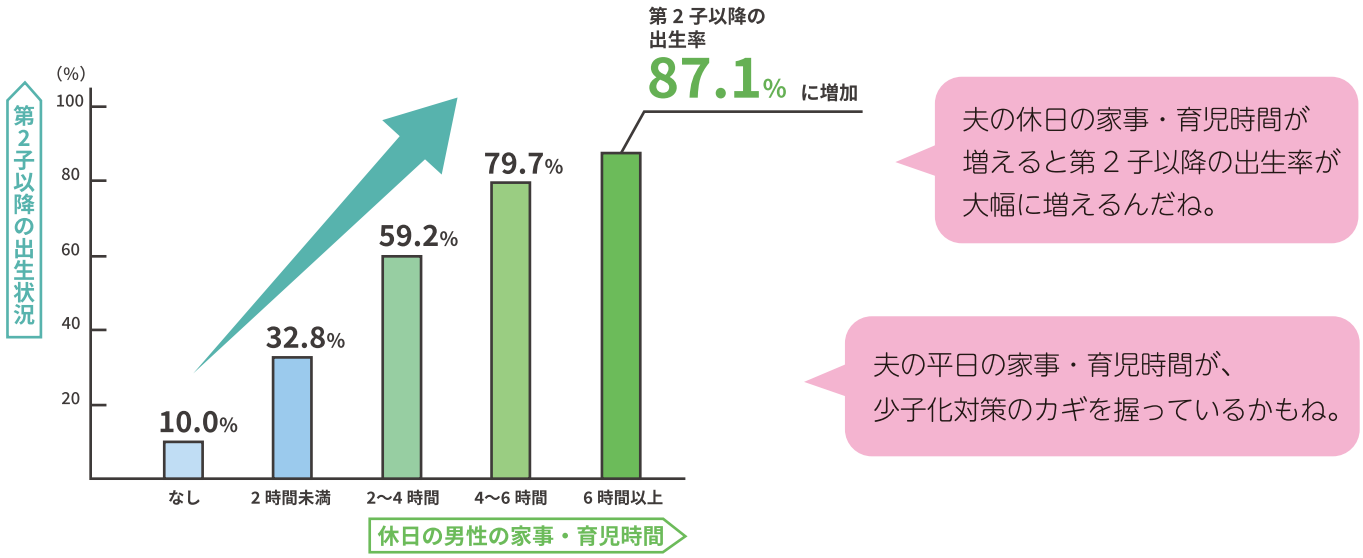
ことば 4 男の家事が社会を救う！

ディスカッションの中で、ひとりの男子高校生が瀬地山さんに次のような質問をしました。

「男の家事が社会を救う、という結果は社会にどのようにあらわれますか？」

瀬地山さんの答えは、「出生率に反映される。男が家事をする社会の方が出生率は上がる。」というものでした。

内閣府男女共同参画局が下図のようなデータを公開しています。



「男性の暮らし方・意識が変われば日本も変わる」（内閣府）https://www.gender.go.jp/public/conceptposter/pdf/conceptposter_a4.pdf を加工して作成

日本と海外の育児休業取得率の状況

日 本

女性：80.2%

男性：17.13%

出典：厚生労働省「R4 年度雇用均等基本調査」

諸外国の男性の取得率

フランス：100%

2021 年 7 月～男性の 7 日間の育休取得を義務化

ノルウェー・スウェーデン：約 90%※の取得率

※出典：『男性の育休』小室淑恵　天野妙 著　PHP 新書　2020 年

それぞれの国において制度の中身が大きく異なるため、育児休業取得率だけを比べることは最適な比較ではありません。

「女性と男性の 1 日あたりの家事･育児時間　国際比較」（P.2 参照）において、フランス・ノルウェー・スウェーデンといった国々の夫の育児時間は、日本のそれと大差はありません。しかし、家事時間は大幅に長くなっています。

夫の家事時間の長いこれらの国々は、出生率を高めることに成功した国々でもあります。

この結果から、少子化対策と男性の家事は密に関係していると考えられます。

イクメンを撲滅しよう！

寄稿　瀬地山　角 さん
（東京大学大学院 総合文化研究科 教授）

「イクメン」という言葉が大嫌いです。ことあるごとに「イクメン撲滅！」を唱えています。「イクメン」を日本語で定義すれば、「自分の子どもの育児に積極的に関わる父親」でしょうか。これ英語に訳すとどうなると思いますか？たぶん father とか daddy とかにしかならないはずです。自分の子どもの育児に父親が関わるのは、あたりまえのことだからです。英語以外の私が知っている言語でも同じだと思います。

あたりまえのことをやっているだけなのに、あたりまえのことがあたりまえに行われていないために、あたりまえのことに特殊な用語が与えられてしまっている。つまり自分の子どもの育児にすら、ろくに関わらない「父親」なるものがのさばっている社会でしか、この用語法は成立しないのです。その意味で日本社会の異常さを象徴するような用語だと思います。この言葉が通用しなくなることをずっと願っています。

そしてこの「イクメン」をあたかも立派なことのように賞賛するマスコミの姿勢も正されるべきでしょう。性別を逆にした「イクウィメン」という言葉は成立しません。女性が育児に関わるのが当然とされているからです。これに対し男性は半分家事育児を分担するだけで「協力的な男性ですばらしい」と褒めてもらえる。おかしくないですか？さらにもしマスコミの現場の半数が女性だったら、この言葉が流通することもないのではないか、と思うのです。

同じようにたとえば、世界経済フォーラムの発表した男女の格差を表す２０２３年のジェンダーギャップ指数で、日本が１４６カ国中１２５位だったニュース、これももしマスコミの現場の半数が女性だったらもっと大きなニュースになるのではないでしょうか？国会議員の半数が女性だったら選択的夫婦別姓なんてとっくの昔に実現しているはずです。もっと身近な話でいえば、連休のたびに女性トイレが長蛇の列になりますが、男性トイレで同じ現象がもし起きていたら、早急に対策が取られるのではないでしょうか？

人ごとではありません。私が数年前に勤務先の防災会議に出たら、非常時の備蓄として水・食料・トイレがあげられていたのに、生理用品が抜け落ちていました。女子学生が2割しかおらず、かつ赤門のあるメインキャンパスではないので、構成員1万人弱の小さいところですが、それでも女性は千数百人はいます。意思決定の場に女性がいないとこんな恐ろしいことが起きてしまうのです。

これらの例でわかるように、組織の男女比のゆがみは、結局結論のゆがみを引き起こします。「イクメン」が称揚される状況もそれを象徴する事例の１つです。16人中7人が女性の小野市議会が、全国のお手本となるような議決をしてくれることを期待しています。